

平成28年度天皇杯受賞者受賞理由概要
農産部門

ICT管理ツールを活用した効率的な大規模水田経営の実践

○氏名又は名称 有限会社 鍋八農産（代表 八木 輝治）

○所在地 愛知県弥富市

○出品財 経営（水稲・小麦・大豆）

○受賞理由

・地域の概要

弥富市は、愛知県の西南端に位置し、木曾川を挟んで三重県に接している。名古屋市の西側20km圏内に位置し、都市部、農村部、海岸部を併せ持つ地域となっている。また、海拔ゼロメートル地帯が大きく広がる極めて平坦な地形であり、砂土の割合が高く、肥沃度の低い土壌が多い地域である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

有限会社鍋八農産は、先代の賢治氏が昭和37年に鍋田干拓に入植したことが始まりで、平成10年に法人化、輝治氏は平成18年に代表取締役就任した。平成26年産の作付面積は水稲127ha、小麦30ha、大豆21haに加え、耕起・代かき98ha、田植え123ha、収穫123haを作業受託しており、愛知県内屈指の大規模水田経営体である。

・受賞者の特色

（1）トヨタ自動車と連携した効率的な作業体制の実現

異業者交流で作業管理の課題について話をしたことがきっかけとなり、作業管理解決のためICT管理ツール「豊作計画」をトヨタ自動車と共同で開発。1日の作業計画をクラウドサービスで従業員に割り振り、従業員は作業指示やほ場位置図を確認し、作業にあたる。作業の開始、終了を現場で入力することでリアルタイムに作業内容を報告し、作業の進捗管理に役立てている。

また、それまでは農機具や資材等が乱雑に置いてあることで作業に支障を来すこともあったが、トヨタ生産方式（「見える化」「ジャストインタイム」）を採用し、農機具ごとの収納場所を決め、ネームプレートの設置や白線枠の表示をするなど整理整頓を徹底し、作業効率の向上を実現。これらの効果もあり、従業員1人あたり約23haと非常に大規模な水田を管理することが可能となった。

（2）経営の多角化による総合ビジネスの展開

加工品製造直売所「やぎさんちの台所」では、餅や赤飯、米粉ピザやシフォンケーキなど多彩な商品展開を行っており、スーパーやJA直売所などへ販売している。

また、平成27年には弥富駅前「おにぎり商店きはち」をオープン。自社生産米を使ったおにぎりやお米を販売している。

・普及性と今後の発展方向

6次産業化をさらに充実させ、「安心して任せられる作業・経営の実践」を継続しつつ、美味しさ、安心・安全、やりがい、さらなる効率化など質を追求する経営を目指す。

平成28年度天皇杯受賞者受賞理由概要
園芸部門

高糖度みかんのブランド化で全国トップクラスの高単価を実現、産地拡大

○氏名又は名称 ながさき西海農業協同組合 させぼ地区かんきつ部会

(代表 古川 公彦)

○所在地 長崎県佐世保市

○出品財 経営(うんしゅうみかん等)

○受賞理由

・地域の概要

佐世保市は、長崎県の北部に位置し、南部の中山間地帯でかんきつ類や落葉果樹が、平坦地では水稻や施設野菜・花きが栽培されている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

させぼ地区かんきつ部会は、部会員284名で、うんしゅうみかんの販売額27億円、県内シェア44%を持つ。糖度基準による「味っ子」等のブランド化を進め、ブランド率を高めるため、①「園地登録園制度」の導入、②シートマルチ栽培の導入と被覆率向上③佐世保市発祥の「させぼ温州」の栽培技術確立等に取り組んできた。その結果、ブランド率は約7割を超えて全国トップクラスの高単価を実現し、平成27年度の部会員1戸あたりの販売額は平成22年の148%、産地の栽培面積は平成20年の113%になっている。

・受賞者の特色

(1) 技術

- ① 部会全体の果実品質向上のため、園地ごとに登録を行い、統一した栽培管理で果実分析の審査に合格した園地のみかんだけをブランドとして出荷できる「園地登録園制度」を構築した。現在では、出荷可能な園地は全て登録され、品質データ等を生産者にフィードバックすることで栽培管理の改善を行い、技術の高位平準化を図っている。
- ② 露地みかんの糖度を上げる技術として平成元年からシートマルチ栽培を導入した。小規模基盤整備等によりマルチ被覆を容易にすることで部会のマルチ被覆率はほぼ100%を達成しており、JA部会単位での取組としては全国一である。
- ③ 高糖度で赤みが濃い「させぼ温州」は、生理落果しやすく栽培が難しいが、シートマルチ栽培等による高品質果実安定生産技術を確立し、県内に普及している。

(2) 経営

部会役員は30代・40代から選出し、部会活動を活性化させている。また、販売促進活動等を通じた消費者ニーズの把握や、有名果物専門店と共同での加工品開発、雇用労力確保のため生産者が共同で周年雇用するシステムの構築等を行っている。

・普及性と今後の発展方向

本取組は、全国のかんきつ産地からも注目され、発展の指針となるものである。今後は、更なる産地拡大のため、新規就農者や大規模経営者の確保・育成、雇用確保、労力削減に向けた新たな選果体制の構築等に積極的に取り組むこととしている。

平成28年度天皇杯受賞者受賞理由概要
畜産部門

条件不利地域「南ぬ島」での酪農経営、ジェラートにかける想い

○氏名又は名称 農業生産法人 有限会社 伊盛牧場（代表 伊盛 米俊）

○所在地 沖縄県石垣市

○出品財 経営（酪農・加工）

○受賞理由

・地域の概要

石垣島は、年平均気温24℃の亜熱帯海洋性気候に属し、半年間は最高気温が乳牛の生産環境限界温度とされる27℃を越える。また、離島で台風襲来の多い地域であることから、乳牛飼養にとって条件が不利な地域である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

伊盛氏は、台風襲来が多い島では畜産が適すると考え、和牛1頭から畜産を始めた。しかし、離島で生乳が不足していたため酪農に転換。平成5年に農業生産法人有限会社伊盛牧場を設立し、平成17年に暑熱対策を取った牛舎の整備を実施し、暑熱に強い牛群改良を進めることにより、生乳生産を軌道に乗せた。その後、ジェラート等の加工販売所を開店し、平成25年の新空港開港に伴い空港内に2号店を構えた。平成27年度末で、役員4名、従業員19名、売上総利益は対平成25年度比143%と飛躍的な伸びを示している。

・受賞者の特色

(1) 亜熱帯・離島での酪農

牛舎は日射や通風に配慮し、送風器や噴霧装置を設置する等の暑熱対策を取っている。また、性判別精液により自家産で耐暑性に着目した乳牛改良を進めている。さらに、土壌改良を行い牧草地にローズグラスを栽培し、年6回の刈り取りと3年毎の草地更新を行っている。これらにより粗飼料はアルファルファペレット以外は完全自給、平均乳量7,565kg/頭、乳脂率4.0%と都府県酪農と変わらない品質を維持している。

(2) 畜産物を用いた6次産業への参入

特産の黒糖、紅いも、果実など規格外で出荷できない産品を地元生産者から引き受け、多彩なジェラートを商品化して地域資源と産業を結びつけた。また、廃用した乳牛の肉を利用したハンバーガーも人気を集め、石垣島の振興と発展にも貢献している。

(3) 女性の活躍

女性従業員12名（うち正社員4名）を雇用し、女性の発想や感性を活用した商品開発や販売促進に取り組んでいる。短時間型の勤務シフトを選択できるなど、家庭と仕事が両立可能な環境を整備し、地域社会と結びついた経営を展開している。

・普及性と今後の発展方向

増加する顧客に対応するため、新加工施設を建設中。さらに、交雑種肥育にも着手し、売り上げ増加に対応するための規模拡大を図っている。伊盛氏は、観光客により収入が増加しているものの、土地に立脚した酪農が大切との思いから、1次産業を重視し暑さに強い牛群を構築しながら地域の实情に沿った特色ある酪農経営を目指している。

平成28年度天皇杯受賞者受賞理由概要
蚕糸・地域特産部門

最高級畳表の生産による熊本県産畳表のブランド化への貢献

○氏名又は名称 早川 猛・早川 克美

○所在地 熊本県八代郡氷川町

○出品財 経営（いぐさ）

○受賞理由

・地域の概要

氷川町は、熊本県南部に位置し、町の中央部を東から西へ氷川が流れ、東部に山林、丘陵地帯、西部には不知火干拓地をはじめとした平坦地帯が広がり、豊かな自然を生かした果樹や野菜などの農林業が基幹産業である。いぐさ栽培は昭和初期から行われ、中央部から不知火干拓地にかけては水稲とともに産地を形成している。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

早川氏は、いぐさ栽培・畳表加工と水稲（もち米）栽培をしており、平成26年の耕作面積は、いぐさ1.8ha、水稲（もち米）1.8haである。また、先進技術を積極的に取り入れ、熊本県のいぐさ奨励品種「ひのみどり」を用いた最高級畳表を生産している。経営の重点を高品質の畳表生産に置くことで高所得率を確保している。

・受賞者の特色

(1) 高品質の畳表製造

高品質のいぐさを生産するために、水稲（もち米）を輪作体系に組み込み、連作障害を予防している。畳表を製織する工程では、原草選別に用いる「色彩選別機」をいち早く導入するほか、「ロール型傷防止板」を考案・実用化し、乾燥機の「反射板」を共同開発するなど、機械の積極的利用と改良を進めた。また、自ら織機等のメンテナンスを徹底して行っている。これらの取組により高品質で均質な畳表の生産を可能にした。

(2) 熊本県産畳表のブランド向上

平成21年に京都「相国寺」方丈の畳改修が計画された際には、これまで用いられていた「備後表」に代わり早川氏の畳表が納められることとなった。これにより八代の畳表が「備後表」と並ぶブランドであることを認知させた。

(3) 女性の活躍

妻の克美氏は、畳表の製織に携わり最高級畳表の生産の一翼を担っている。また、消費地の畳店経営者に対し、いぐさの刈取や畳表の製織などの体験研修を行う際には主として対応に当たるなど、熊本県産畳表のPR・振興に貢献している。

・普及性と今後の発展方向

地域のいぐさ農家等に対しては、自らが研鑽して習得した栽培・加工技術を伝授することで技術を未来へ繋ぎ、さらに高めてもらう取組を行っている。

また、消費地の畳店経営者を積極的に産地へ受け入れ、いぐさの刈り取りや畳表の製織などの体験研修を行うとともに、いぐさ・畳表の伝統と文化を消費者へ伝える機会においては、自らが赴き、消費者へのPRを行っている。このように産地と消費地の交流を図ることで、八代産畳表のブランド価値向上と消費拡大を図っている。

平成28年度天皇杯受賞者受賞理由概要
林産部門

集約化による効率的な事業を展開、地域全体の事業量・雇用拡大に貢献

○氏名又は名称 八頭中央森林組合（代表 前田 幸己）

○所在地 鳥取県八頭郡八頭町

○出品財 経営（林業経営）

○受賞理由

・地域の概要

鳥取県東南部は、兵庫県、岡山県との県境に1,000mを越える山々が連なり、県東部の重要な水源地である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

当組合は、八頭町、若桜町及び鳥取市の一部を管轄する鳥取県最大の広域森林組合である。平成19年から利用間伐主体の経営へ転換し、森林施業の集約化と路網等の基盤整備を進め、コスト意識を持って収益のある利用間伐を推進してきた。将来の目標は、一定の木材生産量を確保しつつ循環的利用が可能となる森林を、次世代に引き継ぐこととしている。平成19年度3億円だった取扱高は、平成27年度は11億円を超えた。

・受賞者の特色

（1）集落を糸口にした施業集約化の推進

年間130回以上の集落座談会を重ねて集約化の必要性を訴え続け、丁寧に集落毎の問題解決を図った結果、森林経営計画は、平成27年度末に累計118団地、約1.1万haに上り、そのほぼ全ての面積を経営受託により策定している。

（2）異業種・新規参入事業者との連携による円滑な事業拡大

事業拡大に伴い、組合作業班の人員・機械装備を拡充するとともに、建設業者や新規参入事業者との連携を拡大した。これにより、路網開設延長は平成19年度に5km/年であったものが平成27年度には73km/年へと伸び、素材生産量は平成19年度に600m³であったものが平成27年度には66,531m³へと増大した。また、連携事業者は18社に及ぶ。

（3）成果主義を取り入れた職員育成

I・Uターンを含めた職員の採用を進め、平成19年に29名だった職員数は、平成27年には73名に達している。職員教育にも積極的に取り組むとともに、能力に応じた職員配置や生産量を賞与に反映させるなど成果主義を導入している。

・普及性と今後の発展方向

集約化による利用間伐の推進と森林組合の改革を同時に展開し、連携事業者を含め地域全体の事業量・雇用拡大を実現している。林業の成長産業化に向けた全国モデルになるものと期待される。

平成28年度天皇杯受賞者受賞理由概要
水産部門

カキ養殖業を未来につなげるために

○氏名又は名称 唐桑町浅海漁業協議会青年部（代表 小野寺 芳浩）

○所在地 宮城県気仙沼市

○出品財 技術・ほ場（多面的機能・環境保全）

○受賞理由

・地域の概要

気仙沼市唐桑町は宮城県の最北東端にあり、三方を海に臨む細長い半島の町である。三陸沖漁場をはじめとした自然の好漁場を擁し、遠洋漁業先駆けの地としても知られているほか、静穏な入り江を活用したカキやホタテの養殖が盛んで、漁業者による植林運動である「森は海の恋人運動」はこの地を発祥の地としている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

唐桑町浅海漁業協議会青年部では、地域の子供たちの海離れが進む中、基幹産業であるカキ養殖やふるさとのすばらしさを認識し、理解と知識を深めることが重要と考え、「総合的な学習の時間」を活用したカキ養殖に関する学習支援事業を開始した。以降、小学校との連携のもと、震災の苦難を乗り越え10年間にわたって活動を継続し、その蓄積を基に一連の養殖作業行程を学ぶ総合的な体験型の学習プログラムを構築した。

・受賞者の特色

(1) カキの養殖サイクルに基づく学習期間の設定

唐桑のカキ養殖の生産サイクルである3年間にあわせて、4年生から6年生の3学年にわたる学習期間を設定し、各学年の成長にあわせた作業工程と現場での安全確保に配慮し、学習効果の最大化が図れるプログラムとなっている。

(2) 生産から販売まで技術的・体系的にカキ養殖業を学ぶ

学習プログラムでは、漁場の一部を活用した小学校専用の養殖いかだを設置することによりカキ養殖の技術実態を学べるとともに、生産から販売までを体系的に学ぶことができる。生産現場から販売して収入を得るところまで体験することで、カキ養殖業を生業として捉えることができる。

(3) 継続性の確保

青年部のメンバーに現場における作業体験の運営ノウハウが蓄積されていることから、質の高い取組を継続して行うことができる。

・普及性と今後の発展方向

共同開発者である唐桑小学校が一連の体験学習を発表し、ユネスコESD（持続可能な開発のための教育）優良実践事例集に採択されるなど世界的にも高い評価を受けており、学習・教育の模範となる取組として活用されることが期待される。

また、この取組が地域活動へと発展することによって、将来的な漁業後継者の育成や漁業への理解者の創出といった効果も期待できる。

平成28年度天皇杯受賞者受賞理由概要
むらづくり部門

柑橘の有機栽培からスタートしたエコロジカルなむらづくり

○集団等の名称 地域協同組合 無茶々園（代表 宇都宮 俊文）

○所在地 愛媛県西予市

○受賞理由

・地域の沿革と概要

西予市は、愛媛県西部に位置し、総面積は514km²、人口は約4万人（平成28年2月現在）である。基幹産業は農林水産業で、多彩な自然環境や特異な気象条件を反映し、四国一ともいえる多品目産地となっている。

狩江地区（旧明浜町）は、周囲をリアス式海岸と急峻な山々に囲まれており、温暖な気候である。農業と漁業が主要産業で、石灰岩を石積みした段々畑において、良質な柑橘が栽培されている。狩江地区の人口のうち65歳以上の割合は47%（平成22年）に達し、高齢化が進んでいる。

・むらづくり組織の概要

- ① 昭和49年、農薬や化学肥料の使用を前提とした近代農業に疑問を持った青年農業者3名が、西予市狩江地区の急峻な段々畑の一角で、15aの農地を借り受け伊予柑の有機栽培を開始した。
- ② 平成元年に「農事組合法人無茶々園」へ移行し、平成5年には、農産物の販売等を行う総務部門を担う「株式会社地域法人無茶々園」を、平成13年には、大規模有機農業を実践し、直営農場を運営する「有限会社ファーマーズユニオン北条」を設立した。平成25年には、福祉事業に参入するため、「株式会社百笑一輝」を設立した。
- ③ 平成16年に設立した任意組織の「地域協同組合無茶々園」は、これらの4法人をまとめて、事務局機能を担っている。

・むらづくりの取組概要

（1）農林漁業生産面

- ① 国内有機農業の先駆けとして、無農薬・無化学肥料栽培を基本として、柑橘栽培における品質管理を徹底し、「顔の見える関係」を重視した販売戦略を行っている。
- ② 柑橘の加工品に加え、柑橘の果皮エキスや真珠貝等を主原料としたコスメブランドを設立した他、地元の水産物の加工・販売にも取り組んでいる。
- ③ 大規模農場等を活用し、研修生の受入体制を充実させ、新規就農者の育成に取り組んでいる。

（2）生活・環境整備面

- ① 地元漁業者と連携し、地域住民や消費者を巻き込んで、宇和海の環境を維持・向上するため、「豊かな山と海の環境づくり」を実践している。
- ② 女性が活躍する介護事業や配食サービス、ジオポイントの段々畑の観光など、雇用の場を創出し、地域の活性化に取り組んでいる。福祉施設の開設については、老後も安心して住み続けられると、地域において高い評価を受けている。
- ③ 高齢者の「生きがい農業」を推進するとともに、「みかん収穫体験」や食育授業など都市消費者等とも積極的に交流し、環境保全の重要性をPRしている。

・他地域への普及性と今後の発展方向

農業生産組織であった無茶々園が、漁業者と連携して地域環境の保全と漁業の振興を図るとともに、高齢者の生きがいを創造するための地域づくり活動にも取り組んで成果を上げている。この活動は多くの条件不利地域のむらづくりのモデルとなることが期待される。

観光事業の拡充、農家民宿の開設や廃校小学校校舎を拠点とした直売所の新設を計画する等、更なる地域づくりにチャレンジしており、今後の発展が大きく期待できる。